



## 企業における研究

理事 第三研究部長  
商品研究所長 小坂 勇次郎

1970年代の化学工業は従来の量的拡大から質的な発展への変換の時代といわれている。化学産業の研究もこれに対応して大きな変革期になりつつある。しかし本来研究というものは質的なもので従来の研究のかなりの部分が化学工業の量的繁栄の蔭にかくれて研究の質的機能が忘れられていたのではなからうか？

研究という言葉は極めて安易に使われているが、これほど不明確な言葉はない。私は研究というのは不確定な問題をより確定する仕事だと考えるのが最も妥当だと思っている。従って研究には独想性が必要なことは言うまでもないことである。

しかし企業における研究は独想性だけを目的とするだけでは意味がない。企業内の研究はたとえそれがどんなに基礎的なものであっても次の四つの要因の相乗積を大きくすることを目的としなければならないであろう。

独 想 性 × 経 済 性 × 市 場 適 応 性 × 生 産 適 応 性

研究を進めるためには必ず作業仮説が必要である。作業仮説を決めるためには個人的であれ組織的であれこの四つの要因を背景にした情報管理と自由な討論が行なわれなければならないであろう。

企業において研究を担当する者は学理の面で優秀であるだけでなく、経済的あるいは社会的な広汎な常識をもち、たえず将来の予測をあやまらないように心掛けたいものである。

研究はこのようにして決められた作業仮説を実験ないし試験、場合によっては試作などの手段で実証することになる。この実証手段は常に MINI-MAX の原理にもとづいて実施される。この場合に多くの研究サービス部門の援助が必要であり、相互信頼による人間的関係が重要になる。

このように企業の研究でよい研究者になるには非常にむずかしい素質が要求される。一般に研究者には二つのタイプがあるといわれている。W. Ostwald はこれを浪漫型 (Romantiker) と古典型 (Klassiker) に分類している。企業の研究ではどちらのタイプの研究者も重要であるが前者のタイプの人には前述の四つの因子の前の方に比重をかけた着想型の研究に適し、後者のタイプの人には後の方の因子の比重の大きい開発型の研究に向いているのではなからうか。

私たち企業の研究に従事する者は自分の特性を生かした命題を選び、たえず四つの要因の相乗積を念頭におきその成果を企業を通じて社会の発展に寄与するように努めたいものである。